

ゼカリヤ書1章14－15節 「妬むほど激しく愛する神」

1A 妬みの神

1B 異邦人への怒り

2B 罪に対する怒り

3B 贖いの情熱

2A 御怒りにある希望

1B 主から来る災い

2B アブラハムの娘、息子

3B 死に対する憤り

本文

ゼカリヤ書 1 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、前回、ハガイ書を読みました。そして、ゼカリヤ書です。ハガイ書の時に話しましたように、ゼカリヤはハガイと共に、帰還したユダの民にコンビで預言をした人物です。ですから、同じことを話していますが、けれども、ゼカリヤは、多くの幻を見ていて 14 章もあります。そして、かつてダニエル書の学びでもそうでありましたが、黙示的、象徴的な幻になっています。ですので、じっくりとその意味を解き明かしながらゆっくり進んでいきたいと思えます。午後礼拝では、1-2 章のみを読んでいます。今朝は、1 章 14-15 節に注目します。「14 私と話していた御使いは私に言った。「叫んで言え。万軍の主はこう仰せられる。『わたしは、エルサレムとシオンを、ねたむほど激しく愛した。15 しかし、安逸をむさぼっている諸国の民に対しては大いに怒る。わたしが少ししか怒らないでいると、彼らはほしいままに悪事を行なった。』」

ここの、「ねたむほど激しく愛した。」という言葉に注目します。また次の節の「大いに怒る」という言葉にも注目します。8 章 2 節にも、主の同じ感情が書かれています。「わたしは、シオンをねたむほど激しく愛し、ひどい憤りでこれをねたむ。」愛することを、憤ることと一つにして語っておられることが、ちょっと驚きです。愛するという言葉が、私たちは何か、優しさや柔らかさを思うのではないでしょうか？そこで、今朝はしっかりと、神の愛の定義を見てみたいと思えます。主は妬む方であり、そして激しい妬みによって愛しておられる方です。

ゼカリヤが預言を行っていたのは、エルサレムです。ペルシヤがバビロンを倒して、ユダヤ人が帰還して、そこで神殿再建のための工事にとりかかっていた。けれども、周囲住民の反対を受けて工事が途絶えました。けれども、ハガイの預言によって、彼らは主を恐れ、工事を再開させました。そして、再び周囲の圧力を受けています。そして目の前には、山のように積み上がっている瓦礫があります。そのような中で、彼らは圧迫を受けていました。かつてのバビロンのように物理的に虐げられていませんが、空気としては、常に腰を低くしていなければいけない状況でした。

物理的には、戦争も何も起こっていない平穏な状態でありましたが、実質的に彼らは、主の願わられていることを行なわせなくさせる、強い圧力を受けていたのです。

そこで、ゼカリヤの見た幻には、三頭の馬が全地を歩き巡っている中で、「まさに、全地は安らかで、穏やかでした。」と報告しているのです(1:11)。平穏ではありますが、ユダヤ人が神の御心に生きようとするを一斉に押し潰すような力が働いていました。私たちは、このような霊的な圧迫を絶えず受けています。キリストに倣って、キリストに真っ直ぐに従いたいと思っても、それを何とかして押し潰そうとする動きは、直接的なものではなく、いろんな方面で襲ってきます。

皆さんは、「沈黙」という映画をご覧になったでしょうか？日本への宣教に、また背教してしまった先に宣教に来ていた先輩を救出するためにやって来た若い宣教師が、最後にはキリストを否み、他の信者を取り締まり、迫害する急先鋒に利用されます。そして日本人の妻と結婚させられ、仏教徒として生きますが、最後死んだ時にその遺体は手元に、小さな藁で作った十字架を持っていたのです。彼は心では信じていたようなのですが、しかし、表には全く出しません。このような圧迫です。主に真っ直ぐに従おうとすると、いろいろな圧迫を受けるので、それに屈服すると、信仰を公にするのではなく、私的なもの、プライベートなものしようとします。教会では信者らしくふるまっても、世では他の人たちと変わりないように生きる二重生活も迫られます。

主は、このような状況に対して憤り、妬んでおられます。それは、私たちが憤っているのではありません。その反対です。その圧迫しているものに対して憤り、どんなことをしても、神の民をまっすぐに立たせる、火のように燃える情熱を持っておられるのです。ここゼカリヤ書では、主は深く、ユダヤ人を憐れんで、絶対にエルサレムに帰らせる、桜の花がいっぱいになって、散っていくように、エルサレムを良い物で散り乱れるようにされることを決意しておられます。神が同じ情熱を私たちに対しても、抱いておられるのです。

1A 妬みの神

ところで私たちは、妬みという悪い感情であると思います。確かに、これは自己中心的なものであれば罪です。ユダヤ人指導者は、妬みからイエス様を十字架刑にするように企みました。けれども、その妬みと、神が妬むというのは全く意味が違います。人間的な妬みというのは、自分よりも少し優れている人に対して、比較してその人を引き落としたい、潰したいという思いから来るものです。興味深いことに、私たちは大金持ちに対して妬むことはありません。月給が、二百万円と言う人には妬まないでしょう。けれども、自分の月給が二十万円だとして二十五万円の人には意識するでしょう。妬みは比較から来ているからです。ですから、全て人が等しく祝福されなければいけないという平等意識は、妬みから来ています。コラが、アロンとモーセに対して、「全て人が聖なる者とされているのに、あなたがたは人々の上に立っている。」と言ったのは、完全に妬みから出たものです。

けれども、主の抱かれる妬みというのは、親が子に対して抱いている妬み、夫が愛する妻に対して抱いている妬みです。子が自分に反抗している時に、自分の気持ちを傷つけられたから心が痛むのではなく、愛してやまないのにそれを知らないから妬みます。そして夫が、不倫をしている妻に妬むのは、一対一の親密な関係を損なわれているからです。むしろ、その妬みがなければ、本当にその人を愛しているのか？と疑います。主は、十戒をイスラエルの民に与えた時に、「それら(偶像)を拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神(出エジプト 20:5)」と言われました。主は、ただ惜しみなくご自分の愛を注ぎたいと願っておられるのです。その一対一の愛に、イスラエルが他の神々に心を寄せるのであれば、神が排他的であるとか、偏狭だとかいうのではなく、彼らが神の愛の対象であるからこそ、妬みを買います。

1B 異邦人への怒り

主は、妬む方であるので、ご自分を愛する対象に触れる誰か他の者がいるならば、怒りを現わされます。自分の彼女に手を触れるものがあったら、または自分の娘に手を触れるものがあるのなら、自分の瞳に触れられたように、勢いをもって守り、戦おうとしますね。したがって、主は今、ここでユダヤ人に何ふり構わず虐めている異邦人に対して、大いに怒っておられます。出エジプトの時のことを思い出してください。神は、モーセによって「わたしの民を行かせ、荒野でわたしのために祭りをさせよ。」と語られましたが、パロは傍若無人にも、「主とはいったい何者か。私とその声を聞いてイスラエルを行かせなければならぬとは。」と答えました(5:1-2)。主は、ご自分の室に触れているパロに対して、怒りを現わされました。それが災いとなって、エジプトに下りました。そして、ご自分の初めの男の子、初子であると神はイスラエルをみなし、それでパロがいつまでも出て行かせないので、彼の行なっているとおり、彼にお返ししました。つまり、パロの初子を始めとする、エジプト人の初子を殺したことです。

主は、悪い者が私たちに触れることがないように、守り、戦ってくださいます。「1ヨハネ 5:18 神から生まれた方が彼を守ってくださるので、悪い者は彼に触れることができないのです。」触れることはできません。神は、私たちの敵に対して、怒りをもって臨んでくださいます。

2B 罪に対する怒り

しかし、私たちが罪を犯したら、神はそれに対して怒られます。先ほどの十戒、主は、妬む神であると言われた後に、「わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼす」と言われています(20:5)。神が、私たちの犯す罪に対して怒りを示されるというのは、ご自分が傷ついたから、それで私たちに怒っているわけではありません。人間である私たちは、自分が傷ついているから、それで躓き、そして怒ります。けれども、神が罪に対して怒られるのは、私たちがその罪によって傷ついているから、怒っておられるのです。つまり、他者から傷を受けるのではなく、自分自身を傷つけていることによって、ご自身の愛する者が自分自身を滅ぼしてしまっていることに、激しい憤りを感じておられるのです。

神は、決して罪を罰せずにはおかない方です。罪を決して許容されません。しばしば、日本語が同じ発音なので間違えられるのですが、神は決して罪を許す方ではありません。許容のほうの「許す」は、決して行われません。罪は水に流すことはできず、そのまま積み上げられます。神と不義とは全く相容れることはなく、妥協もなく、ですから、罪は積み上がります。主は、自分を躓かせるのが他人であれば、その者に対して怒りを示されますが、自分自身が躓かせているのであれば、その手足の一部を切り取ってしまいなさい、とまで表現されました。「マルコ 9:42-43 また、わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにもつまずきを与えるような者は、むしろ大きい石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。もし、あなたの手があなたのつまずきとなるなら、それを切り捨てなさい。不具の身でいのちにはいるほうが、両手そろっていてゲヘナの消えぬ火の中に落ち込むよりは、あなたにとってよいことです。」その躓きのゆえに、自分自身をゲヘナに追い込んでしまうからです。

3B 贖いの情熱

ゆえに、私たちの神は、贖いに対する情熱を持っておられます。その罪から救うべく、どんなことでも行なう犠牲を払われたのです。イザヤは、男の子が生まれるが、実はこの方は神ご自身であり、御子であることを預言しました。「イザヤ 9:6-7 ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。」主の熱心がそれを成し遂げました。そこまでするか！という感じです。父なる神は、人のところにまで近づくために、ご自分の御子を人間の男の子として生まれるようにするところまでしてくださったのです。人の世界にまで関わり、かつ、人々の間に住むようにするところまで、お節介にも介入されたのです。

そして、罪を取り除き、魂の癒しをもたらすための手段を講じてくださいました。人となられた御子が、その肉体に打ち傷を受け、釘を突き刺されることによってです。「イザヤ 53:4-6 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」私たちの罪を取り除くために、ご自身がその肉体において傷を受けてくださったのです。身代わりに、その罪から来る傷、罪から来る罰をご自身の肉体に受けられたのでした。「人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。(ルカ 19:10)」捜して救うほどの情熱を持っておられます。なぜなら、その罪に対して怒りを持っておられるからです。

イエス様は、この罪の贖い、罪の赦しのためには、表面的な平和や平穏が乱されても構わない

と思われていました。「ルカ 12:49-53 わたしが来たのは、地に火を投げ込むためです。だから、その火が燃えていたらと、どんなに願っていることでしょう。しかし、わたしには受けるバプテスマがあります。それが成し遂げられるまでは、どんなに苦しむことでしょう。あなたがたは、地に平和を与えるためにわたしが来たと思っているのですか。そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ、分裂です。今から、一家五人は、三人がふたりに、ふたりが三人に対抗して分かれるようになります。父は息子に、息子は父に対抗し、母は娘に、娘は母に対抗し、しゅうとめは嫁に、嫁はしゅうとめに対抗して分かれるようになります。」たとえ、家族が分裂したとしても、構わないと思っておられました。人が罪から救われるためであれば、それは火のようであり、人々の心を掻き立てイマス。私たちの平穏な社会、平穏な関係を乱すことさえあります。エルサレムに帰還した人々の間でも、その周辺の住民に火を投じたようなものだったのです。平穏を彼ら乱されるのではないかと、恐れたのです。

2A 御怒りにある希望

本文に戻りますと、ゼカリヤの預言は神の怒りから始まっています。2 節に、「主はあなたがたの先祖たちを激しく怒られた。」とあります。先祖たちに対して怒られ、その影響下にいる中で、なおのこと主にある慰めを語られています。いや、これらの災いが主からのものであるからこそ、希望があったのです。主が災いを引き起こされたのなら、そこには希望があるからです。

1B 主から来る災い

彼らがエルサレムに帰還できている、ということ自体が既に神の憐れみを表していますが、その前、七十年前に既に神の慈しみは始まっていました。エレミヤが、哀歌において、エルサレムがバビロンによる破壊によって、あまりにも無残になっていた時に、彼は次のように歌いました。3 章 25-38 節と長いです。「25 主はいつくしみ深い。主を待ち望む者、主を求めたましいに。26 主の救いを黙って待つのは良い。27 人が、若い時に、くびきを負うのは良い。28 それを負わされたなら、ひとり黙ってすわっているがよい。29 口をちりにつけよ。もしや希望があるかもしれない。30 自分を打つ者に頬を与え、十分そしりを受けよ。31 主は、いつまでも見放してはおられない。32 たとい悩みを受けても、主は、その豊かな恵みによって、あわれんでくださる。33 主は人の子らを、ただ苦しめ悩まそうとは、思っておられない。34 地上のすべての捕われ人を足の下に踏みじり、35 人の権利を、いと高き方の前で曲げ、36 人がそのさばきをゆがめることを、主は見っておられないだろうか。37 主が命じたのでなければ、だれがこのようなことを語り、このようなことを起こしえようか。38 わざわいも幸いも、いと高き方の御口から出るのではないか。」このように、とても悲惨な状態、その災いが、無意味に降りかかったのではなく、主がなされたのであれば、そこには必ず神の良い意図があるのです。神が、何かを既に行われているのです。ご自分の栄光のゆえに、何か良いものをもたらすために、そうされているのです。主は妬む神であり、情熱を持っておられますから、まさにその悲惨な状態は、神が愛しておられることの証拠であります。もし、何事も起こっていなかったら、それこそ自分は神とは無縁の存在であったことでしょう。災いの中に、悪の中に神の愛を知るのは難しいことですが、しかし、それが妬むほどの愛であることを知れば、

自ずと理解できるでしょう。

2B アブラハムの娘、息子

そして主は、ご自分の回復の御業を行なわれます。その熱い愛によって、アブラハムの子孫に救いを与えられます。アブラハムに与えられていたのは、祝福です。けれども、そうっていない。状況はまるで反対のようになっている。そこで主は、18年もの間、病の霊につかれて、背を全然伸ばすことのできない女を直されました。そして、こう言われました。「ルカ 13:16 この女はアブラハムの娘なのです。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。」アブラハムの娘だとイエス様は言われます。同じように、取税人ザアカイがイエス様を自分の家に招いた時にも、主は言われました。「ルカ 19:9 きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。」主は、アブラハムの息子、娘がその約束通りの姿になっていないことに、怒りを持っておられたのです。そしてその怒りは、彼らを直し、あるいは悔い改め、その姿に回復させているのです。そして私たちは今、ユダヤ人でなくとも、異邦人であっても、キリストを信じる信仰のゆえに、アブラハムの子孫とさせられています。その情熱をもって、私たちの生活も回復させようとしておられます。

3B 死に対する憤り

主は、ご自分の憤りを、死そのものに向けられています。ラザロが死んでしまった後のことです。「ヨハネ 11:33-35 そこでイエスは、彼女が泣き、彼女といっしょに来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になると、霊の憤りを覚え、心の動揺を感じて、言われた。「彼をどこに置きましたか。」彼らはイエスに言った。「主よ。来てご覧ください。」イエスは涙を流された。」主が霊の憤りを覚えられたのは、彼らの不信仰ではありません。ラザロが死んだことによって、彼らがこれほどまでに悲しんでいるのですが、死というものがいかに人に悲しみと痛みを与えているのか、それを直面したからに他なりません。主は、死そのものに怒りを発せられ、憤られ、それで、「ラザロよ。出て来なさい。」と叫ばれたのです。ですから、イエス様は死そのものを滅ぼされます。「最後の敵である死も滅ぼされます。(1コリント 15:26)」死は最後の敵です。私たちが妬むほどに愛し、私たちが墓のままに入れたままになされないのです、そこから甦らせ、永遠に生きるものとせしめます。

これほどまでに愛されています。「神はあなたを愛しています。」という言葉は、ありふれており、深く考えません。でも、今、深く考えてください。この熱情的な愛があるからこそ、世界がどんでん返りするような出来事がこれまでずっと起こってきたのです。ハリウッドの映画で、誘拐された愛する娘を救出するために、あらゆる手段を使って敵と戦う時に、周りの人々を引っ掻き回しました。主は、この全世界を相手に、私たちを愛し、罪から解放し、ご自分のものとするために、引っかき回されます。「神は、わたしたちの内に住ませた霊を、ねたむほどに愛しておられる。(ヤコブ 4:5 口語訳)」